

マラウイ 渡航報告書



特定非営利活動法人 聖母（せいぼじゃぱん）

2025年10月25日～11月6日



学生スタッフ

平野 健太郎

上智大学 国際教養学部 4年

吉田 怜

早稲田大学 社会科学部 1年

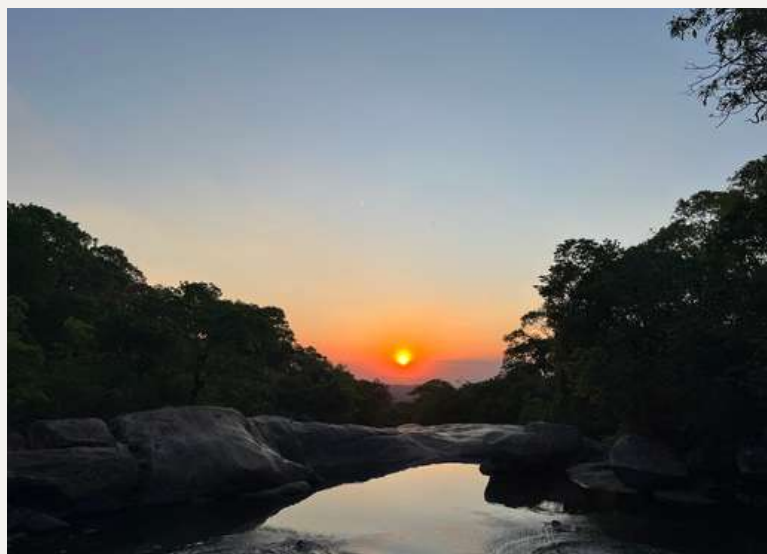
目次

1. 渡航概要
2. 首都リロングウェ
3. せいぼマリア
4. 学校の様子
@北部ムジンバ地区
5. 学校の様子
@南部ブランタイヤ地区
6. Beehive &
Mary Queen of Peace
7. 南部でのひととき
8. Seibo Mills
9. マラウイでの出会い
10. おわりに

注記

今回の渡航には特定非営利活動法人聖母及び、一般社団法人聖母への寄付金は使用されていません。

また、Krizevac Project 関連のロゴにはリンクを埋め込んでおります。



渡航概要

2025年10月25日から11月6日まで、せいぼの学生スタッフである、私たち平野健太郎と吉田怜は、約2週間にわたってマラウイを訪問しました。

2人とも高校生の時からせいぼの活動に携わっており、マラウイに渡航するという長年の願いが叶った渡航となりました。

今回の渡航は、せいぼの学生スタッフによる初の現地訪問であり、今後の継続的な派遣体制を築くための重要な第一歩となりました。

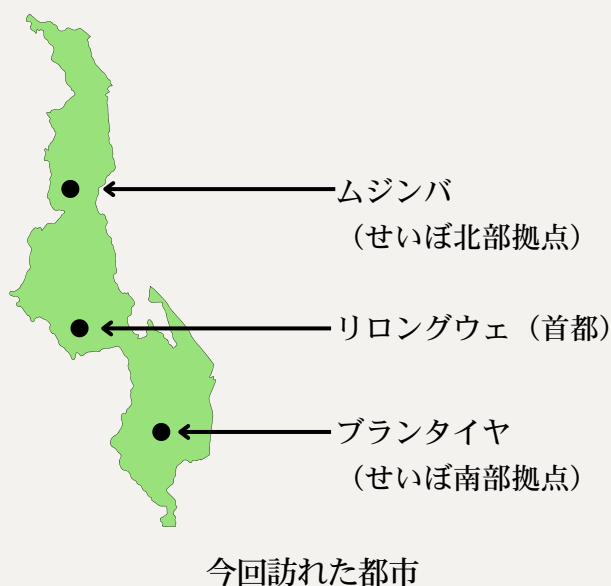
せいぼはマラウイで実際に給食支援活動を行う「Seibo Maria (せいぼマリア)」と、日本でファンドレイジング活動を行う「NPO法人聖母 (せいぼじゃぱん)」の二つの法人として活動を行っています。

今回の渡航では、首都のリロングウェから入国し、翌日、せいぼマリア北部拠点のムジンバ地区に移動しました。その後、南部ブランタイヤ地区に移動し、ブランタイヤより出国。合計10日間の滞在となりました。

今回の渡航には、主に二つの目的がありました。

第一に、**給食支援の現場**と、その効果を直接確認することです。これまで日本側では、写真やレポート、オンラインでの情報共有を通じて状況を把握してきましたが、実際の学校の環境や給食が提供される様子、子どもたちの反応などは、現地でしか分からない部分も多くあります。出席率や学習への姿勢の変化、地域の協力体制など、給食がもたらしている**影響を総合的に把握**することを目的としていました。

第二に、今後**継続的に日本側スタッフが渡航**できる体制を整えるための準備を行うことです。学生スタッフを含むメンバーが定期的に現地を訪問し、活動内容をより深く理解できるようにするため、安全面や移動手段、宿泊先の環境、現地スタッフとの連携方法などを実際に確認し、今後の渡航に向けた基盤を整えることを目的としていました。



移動中に見かけた牛の群れ

首都リロングウェ

街の様子



首都リロングウェは、国の中心都市でありながら過度な都市化は進んでおらず、のびやかな雰囲気を持つ街でした。空港から市内へ向かう途中には歩いて移動する人や、荷台に数名が乗ったピックアップトラック、路上の露店など、生活が道路と密接に結びついた光景が広がっていました。

バス停や店舗には中国支援の看板が多く見られ、近年のインフラ開発の影響を感じました。全体として、リロングウェは首都でありつつも、都市として発展している南部ブランタイヤと比較して落ち着いた空気を持ち、生活の営みが街の随所に現れる独自のバランスを感じる街でした。

Lilongwe Wildlife Centre



リロングウェでは、北部ムジンバへ移動する前に時間があったため、日本大使館の職員の方からお薦めいただいた市内に位置する、Lilongwe Wildlife Centreを訪れました。1時間半ほどハイキングをし、猿をはじめとする野生動物を間近に見ることができました。

在マラウイ日本国大使館訪問



リロングウェ到着翌日、日本大使館を訪問し、担当者の方々と意見交換を行いました。大使館では、マラウイの社会・政治情勢や日本の支援状況、国際機関・民間企業の取り組みなど幅広い情報をご共有いただきました。

また、WFPを通じてリロングウェで学校給食支援に携わる日本人職員の活動紹介や、国内で展開されている日本企業の現状についてもお話を伺いました。

加えて、マラウイ産コーヒーの国内流通状況や、協力隊関連イベントでの販売の可能性といった話題にも触れ、理解を深める機会となりました。

マラウイ国内には現在80名ほどの日本人が在住しており、特に協力隊、NGOなどの分野で活動していることも共有いただきました。今回の訪問を通じて、マラウイにおける日本のプレゼンスを広い視点から学ぶことができました。

Kumbukani宅訪問



リロングウェ滞在中には、Kumbukaniという人物を訪れる機会がありました。彼女は政府機関であるMITC (マラウイ貿易投資センター)の職員で、関西万博にマラウイから派遣されていた方です。到着日には、彼女の甥と姪が空港まで迎えに来てくださり、久しぶりの再会となりました。

自宅は落ち着いた住宅街に位置し、広い敷地に複数の建物が並ぶゆとりある造りが印象的でした。敷地内には果樹や小さな畑もあり、都市部でありながら自給的な生活要素も感じられました。

食事をご馳走になり、大学生の姪・甥と、マラウイと日本の生活、新大統領の話題などについて話す時間となりました。同世代のマラウイ人と話す機会はありませんいため、とても貴重な経験になり、大きな刺激を受けました。



せいぼマリア



団体について



北部ムジンバ事務所スタッフ



南部ブランタイヤ事務所スタッフ

せいぼマリア (Seibo Maria) は、マラウイでせいぼの給食支援を実施する現地NGOで、地域の学校と連携しながら毎日の給食提供を支えるチームです。北部に3名、南部に4名のスタッフが常駐しています。

給食の原料調達、小学校や幼稚園・CBCCへの配送、調理ボランティアのサポート、モニタリングまで、一連の運営を現地で担っています。

マラウイ北部では一校あたりの児童数が多く学校数が少ないため、契約サプライヤーが各校へ直接原材料を配送しています。一方で南部は山間部に小規模校が点在しているため、せいぼマリアのスタッフが自ら学校を回り給食を届けています。

モニタリング体制



南部で給食配布・モニタリングに使用している車両



各学校に配布している
在庫・出席数記録用の帳簿



給食の粘度を確認する
プログラムマネージャー

北部の小学校では毎日、南部の学校では週1回以上、せいぼマリアのスタッフが学校を訪問し、在庫量、調理方法、衛生状況などのモニタリングを行っています。

また、全ての学校に在庫管理用の帳簿を配布し、出席数・期首在庫・期末在庫・使用パッケージ数などを記録してもらうことで、給食の適切な運営と透明性を確保しています。

幼稚園とCBCC

幼稚園 (Nursery School)

- ・民間運営で学費が必要
- ・時間：朝～15時ごろまで
- ・「せいぼキッズ」は主に幼稚園に配置

地域主体の子どもセンター

(CBCC, Community Based Childcare Centre)

- ・地域運営で学費なし
- ・ケアギバー（ボランティア）による自由な学び
- ・時間：朝～11時ごろまで



南部事務所に保管されている
給食の原料



提供品（コップ・石鹸・エプロン）の
使用方法をレクチャーするスタッフ

学校の様子 @北部ムジンバ地区

St. Paul's Primary School



St. Paul's Primary School (セントポールズ小学校)は、せいぼのムジンバオフィスの近くがあり、全校生徒1076人を抱える大規模な小学校。今回は主に8年生の生徒たちと交流し、日本からの訪問であることを伝え、地図を使い日本の位置を紹介しました。学校訪問の締めくくりとして、グラウンドにて集合写真を撮影しました。

Kanyerere Primary School

Kanyerere Primary School (カニエレレ小学校)は、市街地から車で山道を20分ほど登った山間部に位置しています。緑色の制服が特徴的な、比較的規模の小さな小学校です。

同校では給食プログラムの導入以降、出席率が改善しただけでなく生徒登録数も急増し、以前は200名だった児童数が現在は500名に達しています。

また、学業成績も著しく向上しており、以前は50~60%で推移していた試験の合格率も現在90%程度の高水準で安定するようになりました。



Chabere Primary School

Chabere Primary School (チャベレ小学校)は、カニエレレ小学校から車で40分程度山道を行ったところにある、小規模な小学校です。学校には校長先生、委員会メンバー、PTA会長、村長が集まり、「給食のおかげで子どもたちが学校に来ている」「今後も継続してくれることを願っている」といった話を伺いました。また、村長からは「村全体として子どもたちに活気がでて、学校に行くことを楽しみにしている」というメッセージをいただきました。

また、同校では石鹸やカップの贈呈式も行われました。



Mzimba LEA Primary School

Mzimba LEA Primary School (ムジンバレア小学校)は市街地に近いエリアにある、教員52人、児童1381人の大規模な小学校です。全校生徒の人数が多いため、登校時間は午前と午後で授業がわけられています。学校給食の調理時間は2~3時間、給食の提供は40分ほどで行われ、朝4,5時頃から調理が始められています。また、調理用ポットは朝5つ昼4つの合計9つが使われています。SHN (School Health Nutrition)担当の先生によると給食の影響に栄養状態、通学率、成績ともに改善されているそうです。



Kazomba Primary School



Kazomba Primary School (カゾンバ小学校)は、事務所から車で約15分の場所にあり、ムジンバ中心部からは外れているものの、山間部ではなく道路沿いに位置するアクセスの良い学校です。児童数は約900名と規模が大きく、せいぼが2016年から給食を提供している北部で最初の学校でもあります。現在の当校での活動は、JICA岩手県遠野市米粉町おこしプロジェクトから引き継いで継続されています。他校ではほとんど見られなかった男性の調理参加があることも特徴で、学校と地域が協力して給食を支えている様子が印象的でした。

訪問時には、児童たちに将来の夢を聞く機会があり、エンジニア、看護師、先生、裁判官、大学講師など、様々な夢が挙がり、特に先生になりたいという子どもが多い印象でした。

また、JICA隊員として同校で算数を教えている複本さんからは、「なんか子ども達が少ないと思ったら、同僚に『今日は給食がないからだよ』と言われ、給食が出席に強く影響していることを実感した」という話を伺いました。現地の日本人から直接こうした効果を聞いたことで、給食支援の意義を改めて感じる訪問となりました。

Matewu Primary School

Matewu Primary School (マテウ小学校)は、山道を30分ほど進んだ場所にある、全校児童300名弱の小さな学校です。この学校では、他の学校とは異なり、調理に使う薪を子どもたちが一本ずつ持ってくる決まりになっていました。

訪問時には、2名で給食を子どもたちに配膳しました。給食はとても熱く、子どもたちが気をつけて受け取っている様子が見られました。校庭では、子どもたちがボール遊びをしており、ネットボールのゴールも設置されていました。



Kabuku Primary School



Kabuku Primary School (カブク小学校)では、全校児童が集まり、私たちのために歓迎の会を開いてくれました。会では、SHN担当の先生や調理委員会のメンバーも出席され、児童による詩の朗読などがありました。内容には、「給食が健康と力を与えてくれる」「学習に集中できる」といった言葉が含まれていました。また、SHN担当の先生と委員会メンバーによる歌とダンスの披露もあり、トゥンプカ語で「Here comes the seibo」「let's thank」などの言葉が繰り返されました。



委員会メンバーからは、給食が始まった経緯や、せいぼじやぱんの来訪を喜ぶ気持ち、日頃の感謝が述べられ、「自分も子どもに戻ってこの給食を食べたい」という印象的な一言もありました。

校長先生からは、以前は欠席が多かったものの、給食によって児童が授業に集中できるようになり、成績も向上している

こと、病気でも給食のために登校したがる子がいることなど、学校における変化について話がありました。

最後に、平野から「みんな(子ども達)が給食を楽しみにしていることが嬉しい。今後も給食を食べ、よく学び遊んでほしい。」というメッセージを子どもたちへ送りました。

Machelecheta Primary School

Machelecheta Primary School (マチェレチェタ小学校)は、500人弱の子どもたちが通う学校で、ムジンバ市内から少し離れた平地にあります。訪問時には、8年生の生徒たちが歌や劇を披露してくれ、特に「Yewo Seibo (トゥンプカ語で『ありがとう、せいぼ!』)」の歌が印象的でした。劇では、給食を食べて元気になる子どもたちの様子が先生役・生徒役に分かれて表現していました。

キッチンには校舎群から少し離れた場所にあり、学校の施設ではなく近隣の教会が所有する建物を使っているようです。教会の子どもたちにも給食を提供することで、キッチンとして場所を借りているそうです。生徒たちが歌を歌いながらキッチンへ案内してくれるなど、温かい雰囲気印象に残りました。校長先生からは、学校として新しいキッチンが必要であるとのお話がありました。調理は周辺の複数の村の保護者が持ち回りで担当し、地域全体で子どもたちの給食を支えていました。



学校の様子

@南部ブランタイヤ地区

Mlambe CBCC

Mlambe (ムランベ)はチェワ語で「バオバブの木」を意味し、その名の通り、地域の象徴として大きなバオバブの木が立つ場所に位置しています。事務所からは車で約20分ほどの距離にあり、以前小学校として使用されていた建物を、近隣に新しい小学校が建設されたことを機にCBCCとして活用されています。

子どもたちは朝8時ごろから登園してきますが、到着時間にばらつきがあるため、給食は10:45ごろに提供されています。本来は朝の時間帯に給食を出したいものの、「早く出すと食べたらずぐ帰ってしまう子がいる」という理由や、「子どもの人数と到着時間が読みづらい」という状況もあり、現在の時間に落ち着いているとのことでした。



現在、ムランベCBCCには3名のケアギバーがおり、近隣3つの村から集まる合計67名の子どもたちを見守っています。給食づくりは15名の委員会メンバーが交代制で担当しており、地域全体で子どもたちを支える体制が整っていることが印象的でした。

Bwemba CBCC



Bwemba CBCC (ブエンバ CBCC)は、事務所から車で約50分、山の頂上付近に位置する小さなCBCCです。建物は茅葺きで、雨天時には子どもたちを帰宅させなければならないなど、天候の影響を強く受けています。また、屋根付きのキッチンがなく、普段の活動や給食は近くの木陰で行われています。ケアギバーは2名(調理委員会メンバー兼任)で、42名の子どもたちを見守っています。この日は親の仕事について行ったことによる欠席や病欠があり、家庭事情による登園の変動があることも実際に学ぶことができました。

訪問時には、Mobalを通じて「ミキハウス」様より寄付いただいた幼児用洋服を配布し、子どもたちも保護者も大変喜んでいました。

Twirane Nursery School

Twirane Nursery School (ティブイラネ幼稚園) は教会の敷地内にある、45人程度の子どもたちが通う幼稚園です。給食は10時頃に食べていて、薪もせいぼが提供しています。教室の床は土ではないもののかなりぼこぼこしていました。



Future Leaders Nursery School

“Moulding of Tomorrow Leaders” が学校名の由来となっている Future Leaders Nursery School (フューチャー・リーダーズ幼稚園) には42名の児童が在籍しており、2~3.5歳と3.5歳~5歳の2クラスに分けられています。隣には小学校も併設されていて、休憩時間のベルが鳴ると「porridge time! 」と叫び、給食が教室に運ばれてくると拍手が起こるとのことです。



Tikwere Nursery School

Tikwere Nursery School (ティクウェレ幼稚園) は、藁の壁で囲まれた敷地にある30人程度の子どもたちが在籍している幼稚園です。子供たちは名前、図形、数、曜日、母音、夢など歌に乗せて勉強していました。キッチンが教室のすぐ外にあり、屋根のない簡単に作られたレンガの囲いで作られていました。



南部でのひととき

Mulanje

ブランタイヤの中心部から車で1時間半程度の距離に位置する、2025年に世界文化遺産にも登録されたムランジェ山を訪れました。道中には、広大なお茶畑が広がっており、鮮やかな緑の景色を楽しみながらの移動となりました。Likhubula Waterfalls (リクブラの滝)を目指し往復90分程度のハイキングを行いました。滝の周辺では大勢の現地の人々に囲まれ、次々に写真撮影をせがまれる場面がありました。日本からの訪問者が珍しいこともあり、熱烈的歓迎と好奇心を受けるひとときとなりました。ハイキングの最後には山の麓にある池で日の入りを鑑賞しました。雄大な自然に囲まれて見る夕日は格別で、充実した一日の締めくくりとなりました。



The Way of the Cross

ブランタイヤのMichiru Mountain (ミチル山)に位置する「The Way of the Cross (十字架の道)」を訪れました。今回の行程は麓から山頂にある第15ステーションまでを往復する約90分のハイキングでしたが、英国のチャリティ団体「Krivevac Project」によって整備されたこの巡礼路は、単なる登山以上の深い意義を感じさせる場所でした。

急な斜面を登り始めると、イエス・キリストの受難を描いた「ステーション」が次々と現れました。

各ステーションのブロンズ像の前で該当する聖書の箇所を朗読しながら山を登っていきました。山頂には高さ8メートルもの巨大なコンクリート製の十字架が設置されています。登りきった達成感とともに見下ろす眼下の景色は圧巻で、チロモニ地区やブランタイヤの街並みが一望できました。ボスニア・ヘルツェゴビナの聖地メジュゴリエに触発された創設者トニー・スミス氏が、貧困地域に「希望の象徴」をもたらそうとした思いが、この壮大なパノラマと重なります。

短時間ながらも密度の濃い時間を過ごし、地域社会の変革と希望の歴史に触れる、非常に有意義な経験となりました。



Beehive and Mary Queen of Peace



Beehive Centre for Social Enterprise

Beehive は英国のチャリティ団体 Krizevac Project によって運営されている、ソーシャルエンタープライズで、せいぼマリアは Beehive の一部門として運営されています。今回の渡航で訪問した「Beebikes」、「Beetech」を含む、様々なソーシャルビジネスを展開しています。以前までは多くの部門が同じ場所に所在していましたが、規模拡大に伴ってそれぞれの部門がチロモニ地区、ブランタイヤ市内に点在しています。Beehive によって生み出された利益は、教育キャンパス Mary Queen of Peace Catholic Institute の運営に使用されています。



Beebikesはマラウイ国外、主に英国から寄付された自転車をマラウイ国内で販売・整備するビジネスです。108台の自転車を載せた最初のコンテナが英国から2008年に到着し、販売が始まりました。

担当者のMikeさんから「マラウイでは自転車の需要がとても高く、特に子ども達の通学においては、学校に通い続けることができるかを左右するほどのもの」であると聞き、国内に自転車の供給を増やすと同時に、利益を学校運営に回すことができているモデルの重要性を実感しました。



Beetechは銀行、保険会社などの金融機関、学校などのクライアントにデータマネジメントやソフトウェア開発などのソリューションを提供しているソーシャルビジネスです。

せいぼマリアの在庫管理・出席数モニタリングのソフトウェアもBeetechより提供されています。

今後、マラウイの企業や学校等でもデジタル化が進んでいくに当たって、団体内でも成長が期待されている部門であり、マラウイ企業・団体に更なる効率性、安全性などを提供する部門として可能性を強く感じました。

Mary Queen of Peace Catholic Institute



Mary Queen of Peace（以下MQoP）は、Beehive と Mobal の利益によって Krizevac Project が運営している、ブランチア県チロモニ地区に位置する教育キャンパスです。幼稚園の Mother Teresa Children's Centre、小学校の St. Kizito Catholic Primary School、高校の Carlo Acutis Catholic High School、職業訓練のための専門学校の St. John Paul II Leadership & IT College が配置されています。また、せいぼマリアの南部事務所も同キャンパスに位置しています。今回の渡航では、MQoPキャンパスに位置する幼稚園、小学校、専門学校を訪れました。



Mother Teresa Children's Centre



この幼稚園では0-1、2-3、4-6歳と、子どもの成長レベルに合わせてクラスに分かれていました。ブロックや粘土などの玩具やテレビなど設備はとても充実しており、欧米の幼稚園と遜色ないと思えるほどでした。



St. Kizito Catholic Primary School



St. Kizito 小学校も幼稚園同様、パソコン室や家庭科室などと設備が充実している学校で、イギリスの教育基準に準じている学校であり、他の訪れた学校と比較してとてもレベルの高さを感じました。



St. John Paul II Leadership & IT College (JP2)



JP2は現在約500人程度が在籍しており、実践的な教育に重きを置いている学校です。授業としてはIT、電気工事、機械、ソーラー、管理系統などの内容を展開しています。また、“Upper Level Diploma”も存在し、国内外大学進学を目指すことも可能となっています。



Seibo Mills



滞在最終日、ブランタイヤ市内からチレカ国際空港方面へ向かい、空港を通り越してさらに車で15分ほど進んだ場所にて建設中の Seibo Mills の施設を視察しました。Seibo Mills は、Krizevac Project の新規事業として立ち上げられた、せいぼマリアが給食で使用している原料「リクニ・パーラ (Likuni Phala)」を自ら製造するための工場です。完成・稼働後は、せいぼの給食原料を自団体内で生産できる体制を整えるとともに、余剰分を他団体などへ販売することで、事業の収益化を目指しています。敷地内には工場と倉庫となる2つの大きな建物が並び立っており、今後の事業拡大を予感させるその規模感が非常に印象的でした。

現地では工場のスタッフの方々に案内していただき、施設内の設備や運営計画について詳細な説明を受けました。この新工場は1日あたり8トンもの生産が可能となる見込みであり、11月時点では2025年12月からの本格稼働を目指して準備が進められていました。

品質管理への高い意識も感じられ、この新たな拠点が動き出すことで、私たちが学校給食として提供している「リクニ・パーラ」の供給体制が飛躍的に強化されることが期待されます。多くの子どもたちに学校給食を通じて栄養を届けるための重要な基盤となる工場の将来性を肌で感じる視察となりました。



マラウイでの出会い



The Owen Family

今回の滞在、特にブランタイヤでは、Krizevac Project のディレクターである Vince、その息子の Joe、そして甥の James に大変お世話になりました。

Vince は、せいぼマリア・Krizevac Project・Beehive など、すべての始まりとなった創設者 トニー・スミス氏 (以下Tony) の甥にあたり、1990年代にマラウイでボランティアをしていた Vince を Tony が訪れたのがすべての始まりです。今回は、2025年初めの日本訪問以来の再会でした。

日本から来た私たちを家族のように受け入れてくださり、週末にはムランジェヘ連れて行ってくれたり、とても温かい家族に出会うことができました。

彼らと過ごす中で、2025年に惜しくも他界した Tony の想いが随所に感じられました。そして今も、Tony の志は彼の家族によって確かに受け継がれていることを強く感じました。

日本人の皆さん

マラウイ滞在中、現地で活動されている多くの日本人の皆さんにもお会いすることができました。

特に、普段からせいぼじゃぱんへ貴重な情報を共有いただいている、JICA隊員（特別支援教育）として活動されている木村直さんには、渡航前から多くの情報やアドバイスをいただき、大変お世話になりました。

ムジンバでは、JICA隊員としてカゾンバ小学校で算数を教えておられる榎本さん、日本のNPOである ISAPH（アイサップ）さんの萩原さんにお会いし、マラウイでの経験や現場について貴重なお話を伺うことができました。

ブランタイヤでは、同じくJICA隊員として活動されている木村直さん、まりこさん、ともきさんが宿舎まで訪ねてくださり、Vince たちと夕食を囲みながら、一緒にゲームをするなど、とても楽しい時間を過ごすことができました。

マラウイに魅せられ、前向きに活動を続ける皆さんの姿から多くの刺激を受け、心から尊敬の念を抱きました。今回の出会いによって得られたご縁に、深く感謝しています。

おわりに

私がせいぼと出会ったのは高校2年生のときで、活動に携わり始めてから今年で6年目になります。大学4年生となった今、念願だったマラウイ現地を訪問し、一つの節目となる経験を得ることができました。

特に、これまでオンラインでつながってきたせいぼマリアのスタッフと直接会い、仕事に向き合う姿勢や熱意に触れられたことは、大きな刺激となりました。また、学校の現場や子どもたちの日常を実際に見聞きすることで、写真や動画だけでは伝わらない状況を肌で感じることができました。

今回の私たちの渡航が、今後、せいぼじゃぼんの学生スタッフをはじめとする多くの人にとって、マラウイを訪れるという選択を後押しするきっかけとなれればと願っています。

平野 健太郎



高校時代からせいぼの活動に携わっており、大学進学を機にその関わりを本格化させました。私自身、今回が初めての海外渡航だったため多少の不安もありましたが、現地のスタッフやボランティアの方々からお話を伺う中で、学校給食が子供たちの「学校へ通う動機」そのものになっている現実を肌で感じることができました。今回の渡航で得た貴重な経験と実感を日本での活動に還元し、支援の輪をさらに広げていきたいと考えています。

吉田 怜



今回の渡航は、ご協力いただいたすべての皆さまのおかげで、大変実りある渡航となりました。最後に、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

ー 平野・吉田



特定非営利活動法人

聖母 (せいぼじゃぱん)

📍 東京都北区赤羽西6-4-12

✉ info@seibojapan.or.jp

🌐 www.seibojapan.or.jp

執筆・編集

平野 健太郎 (学生スタッフ)

吉田 怜 (学生スタッフ)

各種リンク・SNSはこちら



せいぼ公式キャラクター
「ポーくん」

